

平成 26 年第 4 回定例会（貝掛俊之議員一般質問）

○議長 横尾 武志君

5 番 貝掛議員の一般質問を許します。貝掛議員。

○議員 5 番 貝掛 俊之君

5 番、貝掛です。

通告書に基づきまして、一般質問をさせていただきます。

まず、一つ目としまして、小・中学校へのエアコンの設置についてでございます。今回の補正予算にもこのエアコンの実施計画の予算が計上されておりますが、この設置の導入計画と、その財源確保はどのように進めていくのかお尋ねいたします。

○議長 横尾 武志君

執行部の答弁を求めます。学校教育課長。

○学校教育課長 岡本 正美君

近年の夏場の暑さは異常であり、猛暑日も増加傾向にあります。このような中、仮設の扇風機により暑さ対策を講じていますが、教室全体に風が行かず、生ぬるい風が流れる状況となっております。とても子供たちが集中して授業を受ける状況ではなく、学習環境の整備が早急に必要と思われまます。12月補正として設計委託の予算を計上しています。また、補助金等を活用するため、防衛省などの関係機関と協議を重ねており、町の持ち出しが少なくなるように、財政当局とも協議をしていきます。

以上でございます。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5 番 貝掛 俊之君

今の導入計画と財源確保でございますけども、具体的に何年度から設置をされるということでしたでしょうか。お願いいたします。

○議長 横尾 武志君

学校教育課長。

○学校教育課長 岡本 正美君

これは補助金の関係、内定、交付決定ということもありまして、早急ということになるかと思えます。早ければ、28年度に、以降に設置ということになると思えます。

以上でございます。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5 番 貝掛 俊之君

防衛省の補助金等はですね、やはりかなり取るのに時間がかかると。2年がかりで取っていかなくちゃい

平成 26 年第 4 回定例会（貝掛俊之議員一般質問）

けないとお聞きしておりますし、我々子育て世代ですね、保護者等はやはり、いつつのか、いつからできるのかというのが大変気になるところでございますので、そのあたり明確にさせていただいて、ぜひですね、今 28 年度から、早ければ 28 年度からというお答えをいただきましたけど、ぜひ、28 年度からはできるようにですね、進めていっていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

それから、続きまして、芦屋町の教育施策についてでございます。金曜日の一般質問でも教育の問題について内海議員と松上議員がお尋ねされておりますが、私も 3 番手としてこの芦屋町の教育、学校教育について質問させていただきたいと思います。

芦屋町では小中一貫連携教育、そして小学校 4 年生までの 35 人学級の導入など、さまざまな教育施策を実施していますが、その施策を通しての教育の目標、あるいは目指すべきところは何かお尋ねいたします。

○議長 横尾 武志君

学校教育課長。

○学校教育課長 岡本 正美君

未来への飛躍を実現する人材を育成するため、基本目標として①社会発展に寄与し得る創造性や個性に富む青少年の育成、②真理と正義を愛し、基本的人権と社会の連帯を重んじる青少年の育成、③人類の平和と反映に貢献し、文化と伝統を尊重し、郷土に誇りを持てる青少年の育成、豊かな感性とたくましく生きるための健康や体力に満ちた青少年の育成を掲げています。

以上でございます。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5 番 貝掛 俊之君

今の課長の答弁は、これは日本国の教育基本法の理念と全く同じですね、課長。私はそういうことを聞いているんじゃないくて、芦屋町と行政の教育として目指すべきところはなんなのかというところで、それで、教育長あるいは町長もそうかもしれんですけども、芦屋町の教育力ナンバーワンを目指すというところで、確かな学力の向上と挨拶を掲げていると思いますが、その点についてお間違いないでしょうか。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

ただいま、課長が申し上げました四つの基本目標というのは、まさに日本国民として育てるべき方向性だというのは間違いないと思っています。そういう方向で全体的には取り組んでいこうと。もっと具体的な話は何だという話であろうと思いますけども、私はやっぱり信頼される学校をつくりたいと。義務教育でそういうふうにはまず思っています。信頼される要素はいくらもあるんだと思いますけれども、私は、学力をつける学校である、そして問題行動の少ない学校であると開かれた学校であると、その三つを信頼される要素と

平成 26 年第 4 回定例会（貝掛俊之議員一般質問）

して私は思っております、就任以来ずっと学校にはこのことを言ってきたところでございます。したがって、議員お尋ねの町長の施政方針も含めまして、教育日本一を目指して行こうという方向には変わりはありません。今申し上げましたような学力を目指し、そして挨拶をやっという、そういう昔からよく言われております心技体、バランスのとれた子供を育てようというのがそうなんですけど、先ほど申し上げましたように具体的にはその三つのことを言っています。

以上です。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5 番 貝掛 俊之君

今、三つの答えが教育長のほうから出ました。学力をつける、そして問題行動が少ない学校、それから開かれた学校と、この3本柱が今教育長が目指すところであるということを今、お聞きいたしました。

じゃあまず、学力をつけるというところで、学力にはいろいろあると思います。今、一概に言えば教育イコール点数で測れる学力というのが、これが一般的な考え方で、先般も学力テストの件が質問されました。それで、世間一般です。この26年度の学力テストの結果、これがやはり、福岡県あるいは全国よりも芳しくないというところはですね、これは一般論からすればですね、本当にごもつとも。そこはやはり真摯に受け止めなくちゃいけませんし、平成24年度から、そういった学力をつけるこの3本の柱ですね。学力、いろいろ教育長が三つの柱を掲げた教育理念のもとで、いろいろな施策の中で35人学級は約1,100万、35人学級をするために、町単独の持ち出しが1,100万、小中一貫校で1,700万、そしてイブニングスタディで約59万。約ですね3,000万円ほどこういった芦屋町単独で学力向上、問題行動が少ない学校、開かれた学校という、こういう施策を掲げるに当たって約3,000万ですね、芦屋町は教育に予算をかけております。

そんな中で、今回の学力テストの結果が悪いということをおっしゃるけれども、私ここで教育長の太鼓持ちをするわけではございませんが、やはり学力テストというのは、小学校6年生と中学校3年生が毎年受けている。そしたら、いい学年もあれば、悪い学年のときもあるんですね。そんなだけで、たまたまことし悪かったというところですね、いろいろ言われるわけでございますけれども、ちょっとデータを私が調べましたら、要は、学力向上についてはいわゆる学力テストの結果もしっかりですけども、どれだけ進学校に合格したかというところがですね、みなさん気になるところで、合格率のデータを21年から調べました。そうするとですね、平成21年、まあこれ公立高校の全体の合格率ですけども、平成21年には合格率が81.5%。平成25年度にはですね、合格率が84.2%になっている。そして、もう一つですね、これ今この第四学区ですか、第三学区。この第三学区の偏差値ベストスリーの高校、3校の合格率、これを推移的に見ますと、平成21年は11.3%だったのが、平成25年には24.3%に合格率が上がっているんですね。これはやはりこの35人学級、小中一貫校等もろもろの施策の結果ではないかと思うわけでございますが、

平成 26 年第 4 回定例会（貝掛俊之議員一般質問）

今その学力テストで、26年の学力テストだけを見て評価しているところですけども、これ1回しかないの
で、先ほども言ったように、いいときもあれば悪いときもあるということで、私が思うにはですね、各学年、
例えばことしの1年生が3年生になったときにこれだけ上がりましたよ、4年生になったときにこれだけ下
がって、6年生でこれだけ伸びましたよという学力の推移を測るような仕組みにするべきではないかと。今、
こんだけ頑張った6年生がですね、学力テストを受けました。この6年生が県よりも悪い、全国よりも悪い
と言われたら、子供としてはどうなのかなと。やっぱり、徐々にでもせっかく伸びているところをですね、
そういうところで判断されて、悪いと言われるものはいかがなものかというところですね、今言ったしっ
かりとした、その各学年ごとの学力の推移を測るデータとかいうのは、つくってらっしゃるのでしょうか。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

文科省にあるのは、おっしゃるとおり小学校6年生と中学校の3年生だけでございまして、これも小学校
では国語と算数だけ、中学校は国語と数学だけということでございまして、そのデータが平均正答率という
形で出ています。問題数は平均正答数、問題に対する正答した数がいくらかと。それに伴って率を出してい
るわけでございます。これは6年生、中学3年生ともに4月早々に検査がありますね。したがって、
6年生のとか中学3年生のとかいうのは、まだあってないわけですから、過去の事例です。だからこの学力
検査の問題をみますと、小学校にしる中学校にしる、小学校の場合、特に3年生、4年生このあたりの
問題も出ている。中学校も同じわけでございます。したがって、今それぞれ学年できっちり力をつけ
ていくことが非常に大事だと思っています。どんだけ伸びていったかということも非常に大事だと思っ
ています。

私たちは今、特に小学校に入ってきたときに、保幼小中一貫という形で、保幼も学習規律やらをきちんと
決めてくださいということでお願いをしております、ご協力を得ております、それでも1年生のときに、
1年の2学期くらいにですね、NRTというテストをやる。これ、小学校1年生から6年生までみんなやり
ます。NRTというテストをみますと、このテストでもう既に相当な差がついている。今、一番私たちが苦
慮しているのは、1年生の差を4年生の段階でできる限り小さくしていきたい。これはあの、小中一貫で
1年から4年までを基盤期という言い方をしていますから、基盤期をクリアするときその差を適度に縮め
ていきたい。そして、5年、6年、中学1年生のときを伸長期前期としています、4年生までの力をでき
るだけ縮めた中で、そして5年、6年でさらに縮めて、できたら中学校に送っていきたい。中学校で、入
ったときにできるだけ少なくしていきたい。これは先日のときにも申し上げましたけれども、3小学校がそ
ういう取り組みをする中で、中学校にできるかぎり差の少ない子供たちを送り込みたいというふうに思っ
ています。

そして、中学1年、2年、3年の中で、中学校を卒業するとき本当の学力は何だと。生きていく力は何

平成 26 年第 4 回定例会（貝掛俊之議員一般質問）

が必要かということをやっ払いこうというように思っています。ちょっと長くなりましたけども、その中で、それぞれNRTというテストが一番わかりやすい。これは全国的なテスト、業者テストでございますけども、その点数をもとに、これも全国とか平均が出ていますから、それを非常にもとにしてやっておりまして、中学校の場合は、これも業者でフクトのテストがございます。フクトはかつては業者テストたくさんありまして、今は回数が少なくなっておりますけども、遠賀郡内、第三学区はほとんどやっておりますので、そのフクトのテストでデータがわかるということでございまして、中学校、小学校の子の学力、小学校から中学校につないだやつを中学校で、先ほど貝掛議員おっしゃいました高校入試ということで、やはり、出口がやっぱり今の義務制にとりましては、出口が、どこに出口を求めるか非常に大事なところでございますから、そこに本人たちの希望に沿った「行ける」学校ではなくて、「行きたい学校」に行けるような子供に育てたいというふうに思っております。

以上です。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5 番 貝掛 俊之君

ちょっと私が求めた答弁とは違うんですけども、要は今、学力テストでしか世間一般は子供たちのことを評価しませんよ。だから、今NRTですか、あるいはフクトで各1年生を推移をずっと取って、1年生のときにこれだけの成績だったんですけども、その1年生が3年生になったときに、こんだけ伸びましたよ、下がりましたよ。そういうデータをですね、我々出してもらったほうがいいんですね。でないとなんか正当な評価とは言えないじゃないかと。やっぱり子供たちが頑張ったのか、頑張っていないのかってわかるのは、そういう推移的な教育の学力に関してですけども、データではないでしょうか。そのデータを我々に公表して、ことしの3年生はがんばったとか、わかるので、それを出せるのか、出せないのかお尋ねしているところでございますが、どうでしょうか。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

そうですね。その業者テストなんですが、非常に厳しいなと思っています。資料として出すのは構いませんけども、公表してどうだという話になってくると、出すことによるメリットもあると思うんです。ご理解いただくという点ではメリットあります。また反対にデメリットもあるだろうと。そうなって、総合的に判断いたしますと、点数だけが一人歩きするということに危惧をするところもありますので、私は子供たちが頑張ったことについては褒めていってほしいと思いますし、そういう意味では資料として出すことには構いませんけども、いわゆるこういうふうに全体にダラーッと出すというよということについては、今ちょっとなんと決心が付きません。

以上です。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5 番 貝掛 俊之君

わかりました。そしたらですね、ちょっとまた元に戻りまして、やはり芦屋町が芦屋町の成長戦略として教育を掲げていくと、私が確か平成 23 年度の一般質問のときに町長の認識をお尋ねしましたら、やはりその教育で芦屋町の活性化をしていくというところでございました。それで、やはり若い世代等ですね、引き込むためには、学力が高い学校にしていかなくちゃいけない。

その中で一番判断の目安になるのが、高校の受験の合格率。それを上げるために今イブニングスタディとこのを実施しております。年間 60 万円の予算でやっていると思いますけども、これがもう少し拡張できないのか。今 1 カ月延ばして 9 月ぐらいから始めていらっしゃると思うんですけども、現場の先生方の声としては、「これは期間が短い。」と。「これ、もう少し延ばせば、もっと進学率が上がるんじゃないか。」という声もありますし、余りするんですね、これは塾、民間の塾等の兼ね合いもありまして、民業圧迫というところのことも懸念されますけども、やはり町としてですね、こういう施策の拡張を進めていくべきではないかと思っておりますけども、お考えをお尋ねいたします。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

進学率というお話でございますけども、これは先ほど議員ちょっと触れられましたが、大体公立高校の進学率という言い方を我々もずっとやってまいりました。公立高校につきましては、残念ながら、はっきり序列化されております。したがって、その中でも大体ざっと見ると、84～85%ぐらいの子供たちが公立高校に行っている。後は私立に行くと、残りは、私立に行く子供たちの中にはスポーツだとか、そういう自分の個性を伸ばすという形で、当初から私立に行くという子供がおりますので、それを除きましても絶対八十四、五%行くという中でございまして、私たちは今この公立高校に入ったらいいという意識を余り持ち合わせないようにしています。と申しますのは、先ほど申しましたように、もう明らかに公立高校序列化が進んでおりますから、できる限りと言いましょか、高いという言い方はちょっと語弊がありますが、やっつけていきたい。先ほど、議員、偏差値でというのはわかりやすいでしょう。偏差値で上位三つの学校の推移を述べていただきました。間違いなく上がってきております。それはまさにイブニングスタディの成果も含めてですね、先生方の取り組みも含めて成果だろうというふうに思っているところであります。

今、9 月からやっていますけども、予算の範囲内で何とかかんとかしてやっているのですが、今いろいろな面で、二極化等の言い方の中で、塾に行けない子供たちの対策がそれぞれの市町でやられているところもございまして。芦屋町の子供たちも塾の通塾率が全国より十何%低いという、先程文科省のデータの中にあり

平成 26 年第 4 回定例会（貝掛俊之議員一般質問）

ましたけども、そういう中でこのイブニングスタディを広げるというのは、大変ありがたいんですけども、結局予算もありますし、子供たちも 9 月からというのは、その 8 月までぐらいはですね、3 年生は部活があるものですから、ここやっぱりしようがないところでありまして、9 月からスタートできたらいいのかなというふうに思っております。

以上です。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5 番 貝掛 俊之君

3 年生は部活があるということですけども、1 年からやってもいいんじゃないでしょうか。小学校の学習が余りできていなかった子供たちが中学校に上がるときに、徹底的に小学校のおさらいをするというところで、中学校の 1 年から半年間でもイブニングスタディをする。それこそ、先ほど言ったボトムアップの教育ですね。どれだけ理解できていない子供たちを理解させるかということが、大事なんじゃないでしょうか。そのあたりどうお考えでしょうか。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

議員のご意見大変ありがたく思っておりますので、中学 1 年生からどうしても部活動が一生懸命なんです。子供たちは、それはそれでやっぱり伸ばしてやりたいところでございます。今、小学校はですね、放課後の勉強会をスタートしております。小学校はいわゆる部活動というものがございませんから、小学校で一つの事例としてですね、今、芦屋小学校が取り組んでいるんですが、4 時ぐらいになりましたら、1 年生、2 年生の先生が応援に来ると。そして、放課後勉強すると。1 年生はもう少し早く帰していますので、先生方はあいていますので、5 年、6 年の先生の応援に 1、2 年生の先生方が 4 時ぐらいから出てもらって、そして皆で助けていこうという学力をつけていこうという取り組みをしていますので、小学校の場合はそれはできると思いますが、中学校の場合はちょっと現場に行って、イブニングスタディやれっていったって非常にきついただろうなど。なかなか子供も乗ってこんだろうという思いがしておりますので、少しそこは小学校のほうにシフトしたいと。

以上です。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5 番 貝掛 俊之君

中学校は水曜日、部活がない日をつくっているんですね。水曜日、週 1 回だけでもできないことはないでしょう。

平成 26 年第 4 回定例会（貝掛俊之議員一般質問）

いいですか、35人学級、小中一貫教育に2,000万、約2,900万使っているんですよ。イブニングスタディ60万円。こちらのほうが費用対効果は高いんじゃないかなと。あくまで学力を向上させるためにですよ。と思います。どうですかね、財政課長、このあたり。費用対効果はすごくいいと思いますけど。私。

○議長 横尾 武志君

財政課長。

○財政課長 柴田 敬三君

お金の話だけだとですね、なかなか学力というのをじゃあお金でということはあると思うんですけども、実際予算の査定をする中で、これ正式は57万円から60万切るような金額だったんですが、最初の年から若干また上乗せをしています。言うように、高校の進学率も上がっているということなんで、費用対効果からいくと随分効果があるものというふうには感じております。今後とも予算査定の中で、財政当局としてはそれだけの内容の説得力があればですね、予算はつけたいと思っております。

以上です。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5番 貝掛 俊之君

説得力があれば予算をつけるというところでございます。

では、ちょっと次に行きますが、次ですね、問題行動の少ない学校を目指していくと教育長は今2番目のほうで言いました。ここからちょっと本題に入っていくんですけども、今35人学級進めてます。これは、確かな学力の定着ときめ細かな指導ができるようにということを進めていっているという認識で間違いないでしょうか。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

そのとおり、そのように私たちも思っております。

以上です。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5番 貝掛 俊之君

そしたらですね、ある学校ですけども、35人学級を実施して、県ではなく芦屋町単独で職員を雇っているんですね。35人学級を実施してきめ細かな教育ができていのかかなと思ったらですね、私から見たら、私の所見ですよ。学級崩壊があります。そういった原因はどうなのか。ちょっと厳しい質問になるかもわか

平成 26 年第 4 回定例会（貝掛俊之議員一般質問）

りませんけども、そのあたりいいですか。1, 100万の予算を投じて35人学級をしていって、きめ細かな教育ができるはずにもかかわらず、どうして学級崩壊というような現状になるのか。その原因は何と考えていらっしゃるかお尋ねします。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

これはですね、町の雇用の講師でございます。福岡県の教員採用試験がですね、ことしあたり小学校の倍率3.4倍ぐらい。北九州は2.7、非常に倍率が下がってまいりました。そこで、だから教員の志望者が少なくなったと一つ一方があります。講師ですから、これは県の講師もおるわけです。県の講師というのは、例えば産休代替だとか、病休だとかそういう方々が、県が定数欠ということもありますが、そういう形で講師を雇うわけですけども、それを雇った後に、後は町の雇用とこういう流れになっています。と申しますのは、先日もちょっと申したと思いますけども、若干勤務の条件が違うわけです。県の講師と町の講師。そこらがやっぱり雇われるほうにとりましては、やっぱり条件のいいほうに行きます。時給等については一切変わらないです。県と同じようにしていますけども、何が一番変わるかという、1学期のボーナスあたりがちよっと少ないという話もあります。それから、一番の問題は、県の講師は雇われたら、経験年数を加算していくわけです。町の講師はそれをやらない。その点で採用されたときに随分差が出てきますから、そういう点で、講師で雇われるほうも、できたら県からいくと。で町。だからどこも、講師を探すのに一生懸命になっておりまして、なかなかないんです。そこらが一つあります。

そういう形の中で、今回おっしゃいましたように35人学級で一人、うちで雇ったのは、大学出てすぐだったというせいもありましたけども、不本意ながら学級経営できなかつたというのが事実でございます。

以上です。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5番 貝掛 俊之君

いわゆる人材不足というかですね、先生の経験値が少ない先生が来たから、こういうことが起こったという事でよろしいですか。教育長。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

今回の場合はそのように思っていると思っています。

以上です。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5 番 貝掛 俊之君

35人学級にすることによって、県の講師にもならなかった、町単独でしか雇えない先生が来て、担任を持つということですね。やはり先生の指導力というのが、やはり担任はですね、大事。でも担任になる器がないと言ったら失礼になるかもしれませんが、そういった先生を35人学級にすることによって二クラスに分けた。片や県のしっかりとした担任が、先生が来ました。片や町で採用する先生。本来であれば40人学級ですので、一クラスでピシヤっとしたですね、一人の先生が教えたらいい学級になったかもしれません。私が思うには、やはりその、教育長も認めていると思いますけど、先生の質ですね。この質を、どれだけいい先生を学校の担任にしていくかというのが問題であって、そういう今問題を抱えている中で35人学級は果たしてどうなのかというところを、私は今、疑問を抱えています。40人クラスにしてですね、しっかりと先生を据えて、例えば今、36人だったら二クラスになるわけですよ。36人から40人までは二クラス——36人以上は二クラスになるわけで、県の、まあ何と申しますか、方針に従っていけば、36人で1人の先生が来て、そこにですね、もう1人サブとしてつける形のほうがいいのではないかと思います、そのあたりどうお考えでしょうか。

○議長 横尾 武志君

教育長。

○教育長 中島 幸男君

講師が全部ですね、能力が低いと言っているわけではございませんので、たまたま今回の場合はそうだったというふうに私は認識しております。ですから、いい講師をできるだけ一生懸命探してくると、私の仕事だろうと思っています。今、全国的に小学校1年生は35人学級。ところがその35人学級どうだと思直しがあるといような、財務省がそういう言い方をしたというふうな情報を聞いていますけども、やはり間違いなく35人以下学級のほうが細かな、きめ細やかな指導ができるというふうに私は思っております。まさに教育は人だとよく言いますが、本当に先生の力なんですけど、今、各市町、いろいろな自分のところで雇用する、そういう講師が段々ふえてきたものですから、そういう意味での講師の奪い合いと言いますか、取り合いの中で、少なくなっているという裏側の事実もあるものですから、私としては35人学級は、ぜひ金がかかりましようけども、進めていきたいと。それに伴って私としては、一生懸命いい人材を取ってきたいということでございます。

以上です。

○議長 横尾 武志君

貝掛議員。

○議員 5 番 貝掛 俊之君

それであるならばですね、こういった崩壊とかですね、ないような学校教育にしていきたいと思いま

平成 26 年第 4 回定例会（貝掛俊之議員一般質問）

す。まだいろいろありますけども、今回はこのあたりで質問を終わりたいと思います。ぜひですね、本当に予算をしっかりとつけていただいているので、そのあたりをしっかりと認識していただいて、教育行政のほうを進めていっていただきたいと思います。

それでは以上で私の一般質問を終わります。

○議長 横尾 武志君

以上で、貝掛議員の一般質問は終わりました。